Osaka University Knowledge Archive

Title	G.Th. リートフェルトの建築作品にみる地域性の表現について
Author(s)	奥, 佳弥
Citation	デザイン理論. 2013, 61, p. 142-143
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53393
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

G.Th. リートフェルトの建築作品にみる地域性の表現について

奥　佳弥／大阪芸術大学

G.Th. リートフェルト（1888-1964）は，レッド＆ブルー・チェアー（原型：1918，彩色版：c.1923），そして，建築家としての処女作，シュレーダー邸（ユトレヒト，1924）で知られる，20世紀オランダを代表するデザイナー，建築家である。ただし，これら初期の作品により，リートフェルトは前衛芸術・建築運動デ・ステイル（1917-32）美学の体現者としてのみ語られがちであり，彼がシュレーダー邸以降40年間にわたる建築活動を通じて，ユニークかつ傑出した作品を数多く実現していることは意外と知られていない。

一方，オランダの専門家のあいだではよく，リートフェルトは，シュレーダー邸以後，デ・ステイルに名を連ねながら機能主義に転向したといわれる[注1)]。確かに，彼は新即物主義，つまり20年代後半よりオランダ建築界をリードした機能主義を目指す運動に参画している。しかし，そうした戦前期でさえ，彼の作品には単なる機能主義に止まらない，多様性や地域性をも包含する近代性が見出される。

今回の発表は，こうしたリートフェルトの作品暦の中でも特異な位置を占める，地域性を表するかたちや素材が際立つ事例を取り上げ，リートフェルトが各々の環境条件や地域的な要素にどのように向き合い，それらをいかに近代的な表現として取り込んだかを指摘し，これまでのリートフェルト＝デ・ステイル，或いは，シュレーダー邸以後のリートフェルト＝機能主義者といった画一的な枠組みを問い直そうとするものである。

1．サマーハウス・フェレイン・ステュアート邸（ブレーケレン，1940-41）

30年代後半より，リートフェルトはシュレーダー邸とは様相を異にする，オランダの農家に伝統的な草葺の勾配屋根で覆われた住宅をいくつも設計している。既存の田園風住宅の特徴に適応させ，勾配屋根を使用するという敷地周辺の住宅協定に沿ったことなどがその動機だが，特にこのサマーハウスではそうした規定を単に受け入れるだけではないユニークな素材や造形の扱いがみられる。

住宅は，周辺の湖水地帯特有の細長い島の一端を弓状に跨ぐように建てられ，その有機的ともいえる造形はまるで自由曲線によって構成されているように見えるが，実際は幾何学的な扇形の平面上に計画されている。外壁の下見板に木の繊維に沿ってラフカットした部材を使い，その面を緑に，小口下端を白く塗り分け，木製断面のかたちを強調している。勾配屋根や下見板張りといった造形や素材が本質的に有するかたちを抽出，近代的な表現として取り込んでいるのである。

フェレイン・ステュアート邸（撮影：Henny Rodijk）

2．障害児のための家　フェリート・インスティテュート（キュラソー，1949-52）

カリブ海の島キュラソーは年間平均気温27.5℃と，日中はとても暑く湿度も高いが，経常的に吹く貿易風がそれを緩和する。それを考慮しリートフェルトは，東からの貿易風を最大限享受するため，敷地に対して斜め対角線上に細長い寝室棟を配し，その角度に合わせて建物全体を一辺約７ｍの正三角形グリッド上に計画している。道路側ファサードは木製の鎧戸によって風を通しつつ視覚的に閉じる一方，緩やかなＶ字を描く大屋根を空に向け跳ね上がらせることで，中庭側を可能な限り開け放っている。この逆勾配の屋根は，雨の少ないこの地方ならではの貴重な雨水を効率よく集めるという一石二鳥の役割を果たしている。日中の強い日差しを和らげる断熱材として藁マットを天井材に使用しているが，それもまたキュラソーの伝統的な民家クヌク住宅の草葺屋根に想を得たものという[注2)]。

現地調査を通じて知った熱帯性の気候やカリブ地方の文化，そこに住む人びとの生活習慣を，対角線グリッドや逆勾配の屋根といった近代的な手法や造形，素材に変換し，屋根と床がつくり出す空間を主体とした大胆に屋外に開かれた建築に結実させているのである。

フェリート・インスティテュート（撮影：Jan Versnel）

3．ソンスベーク彫刻パヴィリオン（アーネム，1955）

パヴィリオンの全体を大きく特徴づける直交する面の構成は，シュレーダー邸以来のデ・ステイル的な造形の復活を思わせる。しかしここでは，粗々しい穴あきのコンクリート・ブロック，透明で硬質なガラス，質感の柔らかな藁天井といった異なる素材を巧みに使い分けながら，大胆な構成を作っている。

中でもコンクリート・ブロックの扱いはユニークで，本来穴を上下に重ねて積むべきところを断面を横にして積み上げ，素材固有の特性を表出させている点が注目される。キュラソーで使った藁天井を断熱というよりその質感ゆえに採用し，塗り分けるのではなく，積み方を変えてまでブロックの部材断面を表出させるなど，それまでの地域性への取り組みを直接的，間接的に援用したものであり，むしろこうしたことが，この作品を戦後オランダを代表する名作にしたと考えられる。

4．結　　び

シュレーダー邸に続く20年代後半から，リートフェルトは労働者用集合住宅や住宅のプレファブ化といった社会的・技術的問題に積極的に取り組み，多くの作品を発表している。そうした活動から，抽象的な造形言語あるいは一義的な機能性の追求にのみ専念してきたようにみられがちである。しかし，今回の事例はどれも，彼が敷地の環境条件や地域性を表する造形，素材を単に受け入れるのではなく意識的に向き合い，それらが本質的に有する物的，質的特性を抽出し，視覚化，或いは抽象化するといった方法により近代的な表現の中に取り込んでいることを示している。そのアプローチは，簡明な空間のなかに近代的な生活の可能性を求め続けたリートフェルトならではものと指摘できよう。

注１）Marijke Kuper, *Gerrit Th. Rietveld Houses*, 2G, 2006, p. 263ほか多数。

注２）Jan de Heer, *Rietveld & Curacao*, 010 Publishers, 2011, pp., 43-45ほか。